

あとがき

2016年は、イギリスのEU離脱、アメリカでの大統領選挙の結果など、グローバル化の進展や多様性への尊重という今世紀に入り重要視されてきた流れに裨差す出来事がありました。ただ、ひとの移動の自由や多様性への理解がない世界に、真の平和は期待できないと思います。いま、立教大学をはじめとする日本の大学で、国際化が重要視されていることの理由の一つが、この点だと思います。大学は、知を探究する世界中の多様な人々が集う場所であればなければなりません。そのためにも、立教大学は海外からの留学生や研究者を受け入れることを積極的に推進しています。

立教大学日本語教育センターは、2011年4月の設立以来、日本語教育及び日本語を母語としない学生や研究者に対する日本語支援の拠点として、海外からの学生、研究者の受け入れに多大な貢献をしています。2016年度からは、短期日本語プログラムもスタートしました。日本語だけでなく、日本の文化や歴史をあわせて学ぶ3週間程度の集中プログラムです。この短期日本語プログラムにおいても、今回のシンポジウムのテーマと同様に、各学部・研究科と協力したプログラムとなっています。

留学生の受け入れについては、2014年に公表した立教大学の国際化戦略「Rikkyo Global 24」で、2024年までに2000名を受け入れる目標を立てています。立教大学の教育・研究の質を高めていくためにも実現しなければいけない数字であると思うとともに、多様な学生が学ぶ環境整備も同時に行わなければいけないことも十分意識しています。英語での講義は今後増えると期待していますが、あわせて、日本語を学ぶ機会や環境を整備することが、日本にある立教大学に世界から学生や研究者が集まってくれるために必要なことだと考えます。今回のシンポジウムでは、日本語教育センターと学部・研究科との連携がテーマとなっています。観光学部、経営学研究所、ビジネスデザイン研究科、異文化コミュニケーション学部および研究科から、具体的な事例を含め、その先進事例の紹介と共に、多くの課題も提起されています。財政面も含め、解決しなければならない問題も少なくないことも理解しています。ただこれまで立教大学が行ってきた質の高い教育・研究が、この先も担保されているわけではなく、提示された課題解決を全学で真摯に取り組んでいかなければならないと考えます。

日本語教育センターと学部・研究科の、このシンポジウムで取り上げられた連携の取り組みは、立教大学の国際化を進める上で、さらに増えていくものと思います。また、増えていかなければいけないものだとも考えます。国際化推進機構としては、日本語教育センターと共に、学部・研究科との連携を強め、質の高い教育・研究を実現するための国際化を推進していきたいと考えます。今回のシンポジウムは、立教大学の国際化のさらなる進展に大いに寄与するものと思います。今回のシンポジウムを企画運営された皆様に、感謝の意を表し、あとがきの言葉とさせていただきます。

立教大学国際化推進機構長／経営学部教授

山口 和範